



埼玉県の腸管出血性大腸菌検出状況

2004年に埼玉県で分離され衛生研究所で確認された腸管出血性大腸菌は、7月12日現在、36株です。血清型はO157が最も多く、O157:H7が27株(75.0%)、O157:H - が4株(11.1%)、次いでO26:H11が4株(11.1%)、OUT:HUTが1株でした。

分離された腸管出血性大腸菌の血清型と毒素型(2004年1月～7月12日)

血清型	毒素型	検出数
O157:H7	VT1&2	18
O157:H7	VT2	9
O157:H -	VT1&2	4
O26:H11	VT1&2	1
O26:H11	VT1	3
OUT:HUT	VT1	1
合計		36

衛生研究所では、分離株数の多いO157:H7についてはすべての株を、その他の血清型については必要に応じてPFGE法を用いたDNA切断パターンによる型別を行っています。現在までに型別が終了しているO157:H7 (VT1&2産生)18株が10パターン、O157:H7 (VT2産生)5株が4パターンと多様なパターンを示しました。O157:H7 (VT1&2産生)ではいくつかの散発事例が同一のDNA切断パターンを示しましたが、明らかな共通食品等の原因を突き止めるまでには至りませんでした。

業態者検便において、保育園の調理従事者からO157:H7 (VT1&2産生)が分離され、緊急対応として園児及び職員の検便を行いました。幸いなことに全員陰性でした。

薬剤感受性では、O157:H7では27株中2株(15.9%)が供試した12薬剤のうちストレプトマイシン及びテトラサイクリンに耐性を示しました。

今後気温が上がり、腸管系感染症の発生が増える時期になります。感染症が発生した際の原因究明調査等へのご協力をお願いします。